

派遣者番号	29K17	氏名	成田 智美
研究主題 —副主題—	事例分析を基にした授業改善ツールの開発 —深い学びを目指した教師の手立てに着目したチェックシートの活用—		
派遣先	東京学芸大学教職大学院	担当教官	露木 昌仙
所属校	足立区立青井小学校	校長	近津 勉

キーワード：深い学び 教師 手立て 授業改善ツール 算数科 チェックシート

1 研究の背景（目的）・主題設定の理由等

これからは社会構造の変化とともに教育の課題も複雑化、多様化し大きな変革が必要である。そのような状況の中、平成28年12月の中央教育審議会答申（197号）が出された。第7章では学びの質や深まりを重視することが述べられている。その具体的な取組として、「課題の発見と解決に向けて主体的・協働的に学ぶ学習」「自主的、自発的な学習」「協働的な学習」の充実が挙げられている。学びの質や深まりを重視しようというのが今回の学習指導要領改訂で強調されていることの一つであると言える。つまり、子供の学びの深まりを目指した授業改善の必要性があることが分かる。

一方、私はこれまで授業をしていて、「子供の学びが深まらない」「協働的な活動が成立しない」などの悩みを抱えていた。しかし、現状を変えることができないままであった。教育調査研究所の研究紀要第95号「小・中学校におけるアクティブ・ラーニングの現状と今後の課題」

(2015)のアンケート結果では、主体的・対話的で深い学びの実現に多くの学校が課題を抱えており、教師の指導力の向上が課題となっている。新しい時代に求められているような授業への改善が4割以上の若手教師の課題であり、これを解決したいと考えた。

そこで、子供の学びがより深まるようになるには教師としてどのような手だてが必要であるのか、先行研究やモデル教師の授業分析を行って明らかにした。そして、その手だてを整理し、特に授業に悩むことが多い若手教師が活用できる授業改善の方策を提案したいと考えた。その際、自身の研究教科であり思考の流れが把握しやすいという点、主体的・協働的な学習が最も多く取り入れられている点から算数を通して行うこととした。

2 研究の内容・研究の方法

若手教師が活用できるような授業改善の方策を提案することが、本研究の目的である。基礎研究では、深い学びの在り方についてを先行研究を通して調査することとした。また、深い学びにつながる教師の手だてを調査することとした。調査研究では調査したことを授業改善に活用できる方法を考え、授業改善として考えた一方策の効果を検証していくこととした。

基礎研究	① 深い学びについての先行研究の分析 →新しい社会に求められている深い学びとはどのようなものか、期待される子供の姿とはどのような姿か等、深い学びに関することについて調べる。 ② 多数の教師の授業参観 →①の分析をもとに、一時間の授業の中で何ができるのか、深い学びに繋がる教師の手立ての視点を集める。
調査研究	③ モデル教師（3名）の授業観察と聞き取りと分析 →教員の手立ての視点を絞るため、模範となる授業の授業観察と視点についての聞き取りと逐語記録の分析を行う。 ④ チェックシートと活用方法の提案 →授業改善に活かす方法としてチェックシートを通して行うために、チェック項目を考え、チェックシートとその活用方法を開発する。
検証	⑤ 授業改善方法の効果の検証 →若手教師とともに授業改善の取り組みを算数科の授業で行い、その効果を検証する。
まとめ	⑥ 効果の分析を通じた成果と課題を明確化、研究のまとめ →方策の成果と課題と研究を今後どのように生かすかを考察し、まとめる。

3 研究の結果

稲垣・波多野（1989）、ジョンソン、DW/ジョンソン、R. T/ホルベック、E. J（2010）、中央教育審議会答申197号（2017）、小学校学習指導要領解説総則編（平成29年告示）を参考に、この研究における目指すべき深い学びとしての児童の姿を、次のように見いだした。

- (i) 各教科の特質に応じた見方・考え方が働いている姿
- (ii) 既存の知識や経験、互いの考えなどを生かして解決しようとしている姿
- (iii) 主体的・協働的に学び合っている姿

これらの姿から多くの教科の授業参観を通して授業における教師の手だてについて調査を行った。

その際、足立区教育委員会の「足立スタンダード」や、チェックシートを作成している東京都教育委員会や石川県教育委員会等のチェックシート等の表現を参考に40以上の手だてを見出した。さらに都内公立小学校の算数を研究している3人の教師の授業観察と聞き取りから次のようなチェックシートを作成した。また、聞き取りからチェックシートの使い方の提案の必要性を感じ、次のように考えた。

深い学びを目指した教師の手立てのポイント			
年 月 日 () 授業者名 ()			
() 学年 教科 () 単元名 ()			
【本時で意識するところ】			
	観	チェック項目	評価
授業時	1	子供が自ら問いをもつような課題の工夫をしている。	
	2	見通しをもたせる場面を設定している。(意見や立場等)	
	3	個人差への配慮と個への対応を工夫し、安心して取り組めるようにしている。	
	4	時間やタイミングに配慮し、協働的に取り組む活動をねらいに沿って設定している。	
	5	子供の反応や様子に着目し、考えやつづきを促している。	
	6	行動や考えなどを具体的に示したり認めたりして価値付けをしている。	
	7	ねらいに沿って、見方や考え方を深める声かけや発問をしている。	
	8	板書に一時間の流れや子供の活動が見え、教師の価値付けが示されている。	
	9	子供の思考に沿って振り返りやまとめをしている。	
	10	新たな問いを引き出すようにしている。	

4: とてもあてはまる 3: 少しあてはまる 2: あまりあてはまらない 1: 全くあてはまらない
【メモ・コメント欄】

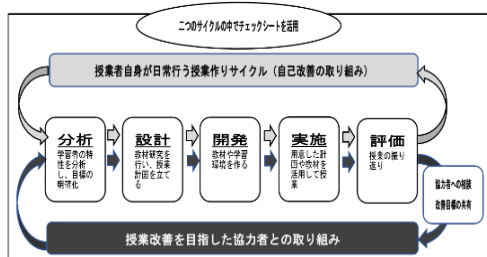


図1 授業改善のためのインストラクショナルデザイン（橋垣・鈴木（2015）をもとに筆者作成）

- ① 授業設計時や評価時に日常的に使用して自己分析することにより、自分の強みや弱みの傾向を知る。
- ② 改善すべき点が見えてきたら、目標を設定する。
- ③ 第三者（協力者）と目標を共有する。相談したり共に指導案作りをしたりすることを通じて、改善に対するアプローチを行う。
- ④ 実際に授業を行い、振り返りを行う。協力者も授業を参観しフィードバックへの情報を得る。
- ⑤ 設定した目標について、自己評価を行い、協力者からフィードバックを受け取る。
- ⑥ その後も設定した目標やフィードバックの内容を意識して授業を行う。

4 研究の考察

所属校の若手教師とともに効果の検証を行った。全14回の授業のうち、協力者と一緒に授業設計を行った10回目の前後で、自己評価の平均点を比較した。協力者の関与後シートの点数が上昇していることが分かった。（図2）

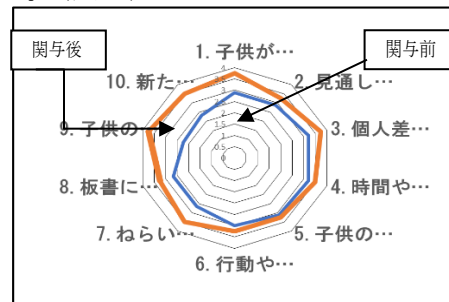


図2 関与前後の平均点比較図

授業者の自己分析だけでは授業改善には直接つながらなかったが、提案したチェックシートの活用により、期待した効果が見られた。特に協力者関与後に評価点数が上がり、授業者が手だてをより具体的に考えるようになった姿が見られ、意識も高まった。さらに、改善目標を明確に設定し、共有することで授業者、協力者共に意識しやすくなったことが感想に出てきた。授業者の強みや弱みについてポジティブな視点とよい雰囲気と一緒にフィードバックができたことも授業改善ツールの活用から見られた。授業者と協力者でチェック項目をより共通理解する必要はあるが、価値観を押し付けず、食い違った部分を埋めるディスカッションをすることができたことから、授業観を掘り起こすコミュニケーションツールにもなった。

5 今後の展望

検証では、学年や単元、対象児童がランダムなものであったため、ある同じグループを同じ単元の学習進度に合わせて担当したとしたら結果は異なる可能性があるのか、単元の流れの中で導入、展開、終末などの影響があるかという視点でも効果を明らかにする必要があると考えた。また、「深い学びを目指した教師の手だて」は、さらに分析し整理する必要があるため、算数科以外にも授業実践を重ねてデータの収集に努め、よりよいチェックシートとその活用の仕方を目指し今後取り組みたい。算数科では研究で得たものを授業で活用し、現場に還元しながらより効果的なアプローチを引き続き探していきたい。